

ヘルダリーンの『多島海』について

會 津 伸

1

1798年9月下旬、詩人ヘルダリーンは、家庭教師として住み込んでいたゴンタルト家を、追はれるやうにして出て、友人が心配してくれたホムブルクの寓居に移った。そこは、商業都市フランクフルト・アム・マインの北西郊にあたり、タウヌスの丘陵地にある小さな城下町であるが、いくたの悲痛な思ひに悩みつゝも、ヘルダリーンはあくまで「詩に生きよう」とした。詩人28才の秋である。

それは、やがてナポレオンが統領として独裁的にならうとしていた時代で、ドイツ側の諸侯は、プロシセンが脱けても之に対抗していた。旧いスイスを崩壊させたフランス軍は、ときにライン河をこえて侵入したり、通過したりして、ヘルダリーンも、母や姉たちの希望と催促にも拘らず、おいそれと帰省も叶はなかった。しかも「シュヴァーベン共和国」のやうに、フランス革命の当初の理念に共鳴して、祖国の改革と革命を画策する動きが活潑で、ヘルダリーンも之に決して無関心、いな無関係ではなかった。

しかし当時のヘルダリーンにとって、何といつてもゴンタルト夫人ズゼツテ——愛用の敬称はディオティーマ——との別れほど、悲痛な体験はなかった筈である。その愛称がプラトーンの『饗宴』に由来するだけでなく、この夫人にこそヘルダリーンは、古典的教養理想の体現をみると思った（たとへば友人ノイファーあて1797年2月16日附手紙）。なんといふ運命だらう！ ヴァイマルのゲートにおけるシュタイン夫人とよく似た、ときにそれ以上の友愛といふべく、社会的にむつかしい、危険な関係でさへある。当然ゴンタルト氏の誤解と嫉妬を買ひ、その怒りが爆発したとき、夫人も惧れて、詩人に立退きを求めたらしい。それを彼女は数日後の手紙で後悔してゐるが、いたいけなのは、教へ子の少年ヘンリーの手紙で、「Hölder さん、ぼくはあなたが居られぬことに、ほとんど耐へられません」と書いてゐる（1798年9月27日付）。

二人の愛情と思想が、どれほど深く切実な、真剣なものであったかは、ヘルダリーンの手紙のみならず、「古い聖譚の奇蹟のやう」（E. Staiger I）なディオティーマの残された手紙でも明らかである。別れて半年後に詩人が使った机をあけ、紙切れや封臘それに一片の黒パンをみつけた夫人は、これらを聖遺物のやうに思ひ、またかつて何気なく描いて与へた墓地の風景画をみつけて、「なんといふ幸福、なんといふ希望があつたことでせう、わたしのうちに、無限

なものと思はれて！それなのに、いまはすべて消えてしまふとは！お返しすべきかどうか分りませんが、すべてこれらの思ひ出が、きのふの夕方のわたしと同じく、あなたの心をひそかに捉へてゆさぶってほしい！——」（3月14日付）それだけに二人の別れが悲痛なものであったことは、察するにかたくないが、弟カルルあての手紙から、詩人自身が総括した言葉を引いておきたい。

……信じてくれたまへ、ぼくは疲れ切つて死ぬほど格闘したのだ、信仰と直観におけるより高い生命を確保せんとして。じっさい！ぼくはあとからみれば、人間が鉄腕をもつて耐へ得るすべてをも圧倒するやうな苦しみのもとに、戦つたのだ……。 (1801年のたぶん3月, *Briefe* Nr.231)

ここでわれわれがおどろくことが二つある。一つはヘルダリーンのやうな、今なら大学院の修士ぐらいの、博く深い学識の持主も、当時詩人として活動しはじめながら、貴族と金持の家庭教師として、それも小学生のやうな少年少女を相手として、生計を立てねばならなかつたことである。もちろん彼だけでなく彼の友ヘーゲルも、彼の師フィヒテも、そのころ貧しい優れた青年たちが甘んじなければならなかつた、ドイツ中産階級ないし知識人の惨めな宿命であつた。しかしそれにも拘らず、ヘルダリーンは、愛する者と生き別れながら、その悲痛な宿命に耐へ、徒らに之を嘆かず眩かず、無為に過すことはなかつた。これはやはりおどろくべきことだと思ふ。別れて半年もすれば、質素な生計も一そう苦しくなり、つひに母へたびたび無心の手紙を出すか、どういふわけか「最愛のママ、母上」とよびかけながら、彼の文章は「親称」を使はず、ふつうの敬称の形である。之はどういふことだらう？詩人は自分の計画が成功したら500fl. 入るなどと皮算用を記したりしてゐるが、彼は自分の理想にふさはしい文芸誌を新しく出さうと計画した。しかしシラーはじめ有力な協力者がとても得られず、あへなく挫折した。けれども彼の詩作は、決して挫折しなかつた。フランクフルト時代の短い頌詩 (Oden) から、いくつも長い頌詩が生れ、悲歌 (Elegien) も生れ、またピンドロスの讃歌やソポクレスの悲劇のほん訳に精を出し、ことに悲劇『エムペドクレス』の完成目ざしてとりくみ、さらに之をめぐつて、長短いくつかのエッセー風の詩論を書いた。「より高い生命」の躍進といふべきであらうか。われわれが之から取上げてみようとする『多島海』も、さういう時期に生れた作品で、たぶん1800年の春とされてゐる。

2

ところでヘルダリーンのホムブルクで借りた部屋は、なかなか眺めもよかつたらしい。母あてよりはくだけた調子の、姉あての手紙の一つに、「当地方のまれにみる美しさが、ぼくの唯一の楽しみです」として、窓からみえる野原、果樹園・柏の木のある丘などあげ (*Briefe* Nr. 174, 1799年早春), また「ぼくの喜びは、美しい天気、朗らかな太陽、みどりの大地だ……もしぼくが白髪少年ならば、春と朝と斜陽とがぼくを日ごとに少し若返らせる筈……」 (*Briefe* Nr.

188, 1799年7月中ごろ)とも記してゐる。後者の一節によれば、さらに興味深いことに、小ぎれいな居間には、世界地図を自分で飾った („mit den Karten der 4 Weltteile“) とさへある。4大陸とみなすなら、ヨーロッパのほか、アジア・アフリカ、そしてアメリカであらうか？ここでふとシラーの詩『世界の分割』 („Die Teilung der Erde“) (1795年) が思ひ出されるが、すでに農夫や商人たちが分け前を貰ったあとにやってきた詩人に向ひ、ゼウスの神が言ふ、「世界はやってしまった。……君が天国にいつしよに住みたければ、君が来るたびにいつも天国を開けておくぞ。」寓話を詩に仕立てたやうなものながら、シラーに傾倒してゐたヘルダリーンの詩人はどこに生くべきか、真剣に考えてゐたとき、之を思ひ出したとしてもをかしくはないだらう。前記の手紙の箇所については、決定版の編者 Fr.バイスナーが、「ヘルダリーンの詩人にとって詩人の本質の一部である旅心と開放のしるし(Symptom einer Wanderlust und Welt-offenheit)」と説明してゐるが、4枚の地図の意味は詩人にとって、恐らく詩による世界の征服ではなく、むしろ世界への敬虔 (Weltfrömmigkeit) と、歴史への参画の気持を語るものではなからうか。

いづれにせよ、窓外の美しい自然と、室内とはいへ、かゝげられた世界地図とにはさまれた小さな机の上で、たぶん1800年の春に、われわれの長詩『多島海』は生れた。もとより詩人の頭と心の内より発して、ペンの先より滴つて、言葉となり声調を成したわけだが、この „Der Archipelagus“ といふ題名自体は、決して古代ギリシャにおける名称ではないから、そこにすでに詩人の近代的感性ないし姿勢が感ぜられよう。「島々の群」を意味するといはれるこの名称は、「マレー多島海」などと使はれるほか、最近ソルジェニーツィンの作品『収容所列島』 („Der Archipel Gulg“) にさへ現れた。それはともかく、新大陸をのぞけば、ギリシャと小アジアにはさまれたこの多島海は、古代の三大陸にかこまれた海を中心といへぬこともないし、島々をふくめてこの沿岸地方に、大河のほとりに発生した文化とはまた違つた、いはば陸と海の風土的対決と協調のなかから、独自の心情と思想の文化が生れたとも言へるであらう。それこそ、古代イオニアの文化であり、やがてヘレニズムを経て、広くまた深くことにヨーロッパの文化の一つの基盤となるべきものであり、ヘルダリーンが学生時代からキリスト教の世界観とともに、或はそれ以上に心惹かれ、とりわけ古代ギリシャの抒情と悲劇に没頭した所以であらう。しかも彼自身、古代の奴隷となることを欲せず、詩人の自由を求め、詩想のあふれるかぎり、詩作をやめなかつた。いま詩人がもう一度、小説『ヒュペリオン』を世に問うたばかりで、いくたびでも、古代ギリシャ、とくにアテナイの黄金時代を見直して、新しい世紀の地歩を固めようとするのも、詩のための詩ではなく、真と美の調和する詩をもって、現代の批判と新しい社会を生み出さんためであつた。果して『多島海』は、古い古いヘクサメターの長袍をよそほひながら、詩人の新しい感懐を十分に盛り得たであらうか、また古い古い多島海自身、どんな新しい風景ないし風土を展開するであらうか？

一陽来福の春の季節をえらんで、ヘルダリーンが『多島海』をうたひ出したことは、少年の

ころから花のなかに育ち、春の生命に神々しいものを感じてきたといふ詩人には、ごく自然なことであった。それは初期の『ギリシャ』 („Griechenland“) と題された讃歌以来、或は小説『ヒュペーリオン』の主人公の行動と自然讃美以来、この詩人には、自明のことのやうである。ただわれわれの詩の冒頭（第1段、1—8行）は、5ないし6箇の疑問文が、ちょうど寄せくる波のやうに、寄せては問ひ返すがごとくである。いはゆる「抒情的自我」(das lyrische Ich) が、つる（渡り鳥）ももどり、船ももどり、海路の日和となり、いるかも波間に日向ぼっこし、イオニアは花咲くときかと、多島海の主である海神（ポセイドンの名は一度も現れず、海の神とか、浪の神と呼ばれる）に、親しく問ひかけるのであるから、いはゞその安否を問うて呼びかけるのである。たゞしこのやうな修辭的疑問を、かるい擬人化どころか、つみ重ねられただけ重たく真剣な問ひと解することもできようし、最近の注釈者にその傾向がつよいことも、いつしか現代的不安を反映してゐるであらうか。たとへば Fr. バイスナーは、「愛しつゝ迫り問ふなかにこめられた独得の不安が、韻律的配列と文章論的配列の矛盾によって深められてゐる」となし、D. リューダースも、「問を重ねることで、現代の世界状況の未解決に相応する緊張が生み出されてゐる」といふ。

しかしある意味で詩人自身が、その理由を説明してゐる。5行目後半以下3行半にわたって、「なぜならいつも自分は、春にこそ御身のもとに來り、凧いでゐる御身に挨拶する、翁よ！」とよびかけ、その春には生けるものは心を新にし、人々の初恋が目ざめ、黄金時代の思ひ出がよみがへる、とされてゐる。波間に浮ぶいるかに、かつて詩人アリーオンを救った故事（ヘロドトス I, 23）が聯想されたか、船の櫓と櫂、帆綱の音に、黄金時代が偲ばれるものか、あまりこまかな因果関係をここに辿ることは、おそらく無意味であらう。むしろ端的に、素直にわれわれも、詩的自我のうたふ声調に合せて、ゆっくりこの8行を誦するならば、なかなか見事なヘクサメターではないかとおもふ。渡り鳥とか、船舶とか、回遊するいるか、花咲く港町など、生物の発情と人間の初恋までふくめて、春の祭の一種はなやいだ情景を生き活きと喚びおこしてゐるのであって、これらの詩句の律動（リズム）と文章は、齟齬をきたすどころか、大きなうねりが豊々とよせ來るやうに感ぜられる。ドイツ語のヘクサメターであるから、1拍ないし1歩脚は、綴りの長・短・短の代りに、強声の強・弱・弱を基本とすることは、いふまでもない。従つて第1脚から強・弱となる（第3・4・5・6行）傾向がみられるが、のちにまみ見られるやうな、弱・弱となつて第2脚に対する上拍（Auftakt）にすぎない場合（たとへば V. 26）は、ここにはみられない。ヘクサメターの息遣ひとして、第1段の各行は、すべて第4ないし第3脚にはっきり区切れ（Zäsur）を示し、第5脚の強・弱・弱（Daktylus）は、おほむね無理なく保たれ、第6脚も巧みに長・長（Spondeus）をおいてゐる（3行目：Delphin,, 5行目：Früh-ling, 7行目：Er-inn-rung), といへよう。

ヘクサメターは本来、調子よく、齒切れよく、ときに軽快に、進んでゆくものであらう。しかし少くともわれわれの詩の場合、それは必しも當らないであらう。J. P. Walser の詳しい比

較検討が示してくれるやうに、有名なゲーテの『ヘルマンとドロテーア』とはちがったリズム感である。むしろゆっくり誦み進むとき、ことに冒頭の強・弱・弱 (Daktylus) が、効きすぎるくらゐひびいて来る。第1行: *Keh̄rēn dīe kranīchē*……の頭韻 (K) も耳につくが、第7行: *Liebē dēn Mēnschēn*……, 第8行: *Komm̄ ich zū dir*……など、どれも長く深く大海原に沈んでゆく感じさへする。そして海原に呼びかける言葉が多彩なのに対して、海原いな海神自身は、黙って答へないので、海の広さ、深さ、そして一種の孤独な面影さへ、われわれは感ぜざるを得ない。そのかぎりにおいて海はまた、孤独と不安の風貌をおびてくるといへよう。しかしイオニヤの春祭りを訪ねる詩人の畳みかける言葉には、孤独な老人に語りかける陽気な子どもにも似て、生き活きた愛の語調、生命の息遣ひがこもってるないだらうか。

3

いつもながら詩人は、海の力の強大さに改めて心打たれるが、それは必しも荒れ狂ふ海を指して居らず、却って「相変らず生きかつ休らふ」(第9行)姿の海である。ここにおいて詩人の眼は、或はつるの翼にのるのがごとく、或はいるかの背にもたれるやうに、みはるかす多島海の沿岸といくつかの島影をえらんで、いはばその自然地理を描いてみせる(第2段, 9—24行)。一般に平地が少く、岩山が海に迫ってゐるが、海は「若者の両腕をひろげて」(第10行)陸地を抱き、他方たくさんの花咲く島々は、みなこの海神の娘たちとみなされ、クレータやサラミス、テーノス(ヒュペーリオンの故郷)やデーロスなどの名があがる。ぶどう酒のキュプロス、清流のカラウリア(ディオティーマの故郷)なども名ざされるが、これらの島々はまた、「英雄の母たち」とされ、神話ないし歴史の舞台にふれてくる。さういへば噴火や地震によって、多島海の風景から忽然として姿を消した島もいくつかあった。それも海神の膝下に没した(第22行末……*dir̄ in dēn Schoß̄ sank̄.*)のであるから、「夜の焰」と「地下の嵐」をも「耐え通す」多島海は、恐るべき神でもある。

さらに多島海においては、天体の力も、しづかに力づよく影響し、協力してくれる(第3段, 25—63行)。その際「はるばると、敏感な人々の頭上に」(第27行: *Fernher̄ bringen̄*……)みちあふれる力の中より運んでくるとして、晴天と熟睡と予感を数へる詩人は、単なる普通日常の自然の感化だけでなく、「古い遊び仲間」として運命の女神たち(Parzen?)の影響をもあげる。さらに「アジアの山の端より、神聖な月の光がさし来り、星たちが波間に往き合ふ」(30行以下)として、星辰と潮汐の微妙な交感作用を指摘し、そのとき「天上の兄弟たちの調べが」海神の胸のうちになりひゞくとして、空と海の宇宙的なハルモニーに耳を傾けさせる。ピュタゴラス流の天体の音楽にもつながる発想であらう。もちろん太陽も、「東洋の子」「つねに朝を作る者」として、生ける人々に黄金の夢をふくらませるとともに、「悲しめる神」のポセイドンにも「一そう喜ばしい魔法を送る」が、日光それ自体は海の波頭——海神の白髪——よりも美しくはない(39—42行)と、詩人はきめこまかいユーモアを示してゐる。

さいごに、エーテルと雲も、空と海を結んでゐないか、と修辭的な問を出して、ことに雲が海神の使として、立ち昇っては雨をふらせ、ときにメアンドロスやカイステルのやうな小川をあふれさすと語り、あげくの果には、海神の長子として、こともあらうにエジプトの大河ニールが、まことに威風堂々と（第52行:Hochher schreitend……）アフリカの奥から流れ来り、腕をひろげてデルタを成すとき、ヘルダリーンの多島海は地中海東部まで一気にひろがる。之はそのころエジプト遠征をやったナポレオンを、いささかなりとも諷刺せんとするものであらうか。「彼は詩に生きることはない／彼は俗世に生きる」（„Buonaparte“）とヘルダリーンは短い詩でうたつてゐる。やはりニールのやうな大河さへ「憧れつゝデルタに達し」（53行）、大海にそそぐのであり、この海神は、空と地と海のすべての自然の力をあつめる力がある。このやうな「多島海」は、やがて宇宙的な大自然にやどるやさしくも測り知れぬ強い力の象徴となる。まことに天地渾然たる祭りの趣きである（*Staiger II*）。

4

もとよりこのやうな考へ方が、どれほどソクラテス以前の、イオニヤ自然哲学などによばれる思想を正確に反映してゐるかどうかは、いま詩人の問ふところではない。たしかにまたこの雄大な考へ方は観念的とか理念的（ideal）なものかも知れないが、眼前の自然、つまり春の海原すら、却って孤独に思はれてならない。夜のしじまに海神の愁訴が海鳴りのやうに聞こえ、ときにさかまく波は、人に背を向けて天へ逃れる（V. 56）。この一句は北斎の「浪裏の富士」を聯想させるが、それはともかく、岩礁を喰んで天に散る怒濤は、何を語るであらうか。とても単なる形容とは思はず、表現主義的な風景とさへ言ひたくなるが、詩人自身の説明によれば、海神の孤独である。たゞし本来片想ひの関係ではなく、海神をうやまひ、その海べに「美しい神殿と都市を飾った気高い人々」が居らなくなり、と同時に海神も、英雄たちが栄冠を求めらるやうに、「敏感な人々の心」を探しては見失ひつゞけてゐるからである。

この第4段は8行から成り、決して長くはないが、内容からも形式からも、ヘルダリーンの特色がよく出てゐる。海原の孤独をうたひ出す最初の行（V.54）は、句切れとともに夜のしじまにひびく海神の歎きをして、次の行へまたがって長く尾をひかせ、その後半から3行目（V. 56）へかけては、荒磯にくだけ散る怒濤をよがき、その句切れ方も極めて効果的で、前半は背き去り、後半は天へ立ち向かふといふ、相反する動きを1行の中に示しながら、同時にこの1行半にわたるヘクサメターにも似て、大きなうねりがずっしりひびいて来るやうだ。われわれはおもはず源実朝の一首を誦したくなる。

大海の 磯もとどろに 寄する浪 われて 砕けて さけて 散るかも
ヘルダリーンのヘクサメター（V. 54—56）をあへて図示すれば：

Dennoch einsam dünkest du dir; in schweigender Nacht hört
A B₁+

示す (V. 73—75)。「大地の賜物を分ち合ひ、遠きと近きを一にする」(V. 75) 商人を、之ほど讃へた詩句は少ないとおもふ。遠い港として地中海東部のキュプロスやフェニキアのテュロス、さらには黒海のコルヒスやエジプトの名が上げられ、大胆な船はジブラルタル海峡をぬけて、「新しい浄福の島々へ」と走った。(V. 76—81) しかしながら詩人の眼には、孤影悄然たる青年の姿がうつる。アテーナイの海べをゆきつもどりつするテミストクレスは、商人たちとは違った想ひにとらはれ、じっと浪の音に聞き入っている。「海の神は彼を徒らには育てなかった」(V. 85) とこの段を結ぶ詩人は、「大地をゆるがす」(地震をおこす) ポセイドンの足もとで予感を受けたとみるわけである。執政官テミストクレスは、マラトンの激戦のあと、政敵を貝殻投票で追ひ、急速に艦隊を整備し、島々との同盟の盟主となったが、彼の予感には海神に負ふものであり、海の彼方にかかはることであった。ここでも、テミストクレスの名はおろか、青年の孤影をこれ以上修飾する言葉は極度に少くて、却って孤影のかげをこくし、その背後にしるびよる大きな暗い影をおもはせる。テミストクレスは、運命の、従って歴史の海べに立っている。

6

その運命について、またもやわれわれは次の第6段で (V. 86—104)、詩人自身の説明を受ける。アテーナイの「守護神の敵」は、いふまでもなく「天下に号令するペルシャ人」クセルクセスであるが、父王ダレイオスの遺志をついで大軍をそろへる傍ら、ギリシャの本土と島々は「遊び」におもへ、その「敬虔な人民」は「夢のやう」にすぎなかった。ここに詩人は、神神を信じその霊で武装したギリシャ人と、神々を信ぜず、野蛮な野心で武装して、ギリシャの信仰と文化を嘲笑するペルシャ人を対比させ、ことに後者の侵寇軍を、エトナ山(シケリア)の噴出する熔岩流にたとへてみせる。アテーナイはもろくも崩れ去り、神殿も住居も兵火にかかってくすぶるばかり、市民たちの祈りも空しい。史実でいへば、紀元前480年の夏8月のことである。

かつて小説の主人公ヒュペーリオンは、いはば旗あげに敗れて、アーヤックスの島(サラミス)に身をひそめた(第1部第2巻の冒頭)。そのとき彼は、マスティクス(乳香の木)の枝で小屋を作り、対岸アッティカの夕映えにもものおもひ、また魚をとり、丘の上でサラミスの海戦について読み耽った、と記される。ヒュペーリオンは、自分の負け戦を心から恥ぢたが、同時に海原をみわたし、自分の人生の起伏をおもふと、その過去は名人のひく弦のしらべのやうに、かくれた秩序のもとに融け合ったといふ。之もすべての対立抗争をそのまま併せ呑んだ、ロマンティシユな瞑想であらうが、さらにヒュペーリオンが、足もとの青草から麦秋の畑をながめるとき、森をこえて、はるかな山脈が天高くどこまでも重なってゆく；白光はただエーテルにたゞよひ、残月が淡くはにかんでゐる、といふ風景描写は、いっそうロマンティシユといふべきであらう。

ヒュペーリオンがサラミスで、このやうな感傷に浸り、また瞑想に耽って、「星空のやうにしづかで感動してゐた」のに対して、われわれの詩ではどうであらうか。「しかしサラミスの岸べで、おゝこの日よ！サラミスの岸で」(V. 104)とじつに激情的な言葉で始まる第6段の調子は、ピンドロスの讃歌に近い感じもするが、しかし詩人はアテーナイの乙女たち、幼児を抱く母親たちと海岸にならんで、海戦の結着をみつめようと耳をすましてゐる。之はトロイアの城壁にずらりと立並んで、浜べの戦ひをみる、あの Teichoskopia (城壁上の展望) (『イーリアス』第3歌)と同じく、すこぶる叙事詩的である。同時に深い海鳴りが聞える一方、神々もかれらの運命を秤で量り、裁きつゝ見下してゐるから、之もホメロスのであらう。

アイスキュロスの悲劇『ペルシャ人』に出る伝令のいきいきした報告によれば、ギリシャのスパイにだまされて、ペルシャ軍は夜通し海上の監視と封鎖をつづけたといふ。さうして疲れたところへ夜明けとともに、ギリシャの艦隊が大歓声とともに突込み、パニック状態に陥ったペルシャの大船団は、互いにぶつかり合ふ始末で、そこを網にかかった魚のやうに、刺され叩かれて潰走する。われわれの詩人によれば、「ゆっくりすゝむ嵐のやうに」戦ひはすゝみ、戦士たちは怒りのうちに、正午にも気づかなかつた(V. 111f.)。「神々の愛子」「アテーナイの子ら」は、「死を軽蔑する」かれらの守護神を今こそ抑えようとせず、幸運をおもひ、「目を輝かして」圧倒してゆく。之に対して「荒野の野獣」ペルシャ王は、もう一度顔色かへて立上り、武器を輝かせてもう一度「野蛮人ども」は奮ひ立った。船と船とはぶつかり合ひ、舵は波間にたゞよひ、戦士たちは甲板をふみ抜き、人も船も沈んでゆく(…und Schiffër und Schiff sinkt. V. 124の重々しいカデンツァ)。それでも負け戦をみとめようとせぬペルシャ王は、勝利の歌を夢にきくがごとく見わたしながら、惨めな結果にほくそゑみながら、脅かしたり、頼んだり、小をどりさへして使者を放ったが、誰一人もどらず、空しかった。詩人がペルシャ王を、いはばわれわれの眼前に見すゑて、何か勢子をかり立てるやうな下知ぶりを語るころは、じつに生き活きとして、ヘクサメターなぞ忘れてしまふくらゐだが、やはりヘクサメターによって、じつに冷静に、事態の結末を見届けることができる。

Droht er und fleht und frohlockt, und sendet, wie Blitze, die Boten;

Doch er sendet umsonst, es kehret keiner ihm wieder.

1行に4の動詞と3の接続詞をならべ、5箇の流音をつらね、2種の頭韻さへそろへて、小刻みに、力づくで押してゆくのに對して、後の行は前の行のさいごの動詞をゆっくり否定し、さらに固い頭韻をふんで使者の戻る気配を消してゆく。散文的にさへみえるが、非凡な手法ではあるまいか。やがて血まみれの使者も、くだける船も、高台にすゑた王座のまへで、復讐の荒波に吞まれてゆく。「打ちふるへる岸べで、哀れな王は、敗走をみ」て、自らもその流れに身を投ずるのであるが、その点について詩人は「彼を海神が追ひやる」と繰返し強調して、サラミス海戦の情景をしめくくつてゐる。

7

アテーナイは救はれた。「ひとり待ちつづける」イリソス河畔に、山々からふるさとに、人人はもどり来たって、いそいそと再建にとりかかる光景、之がつぎの長い段落(V.136—178)のテーマであり、ほぼ全体の中央に位置して、中心的部分であらう。なぜなら之は単に過去のアテーナイの復興の話だけではないから。

まづ第一に目につくことは、「ふるさとの土地」(V. 145)に人々がもどって来る光景を詩人は、久しく行方知れなかった息子を迎へて、喜びながらものうげにその話をきく老母にたとへてゐることである。その理由として、前にも廢墟の姿としてうたはれたが(第5段)、アテーネー女神の神殿も、市場の列柱館も、崩れてしまつてゐる。そこで人々は互いに手を取り合つて盟約を立て(V. 155)、それからめいめいわが家の焼跡にゆき、思ひ思ひに天幕の仮住居を作る。すると市民たちは、太古の自由人のやうに、森の狩人として、また河の漁師として、母なる大地に抱かれて、「神聖な空のもとに落着いておだやかに暮らす」(V. 169f.)。詩人の言葉は、いささか牧歌的・観念的にすぎるであらうか。昼の仮眠に「新しい活動」を告げ、夜の潮騒に「楽しい夢」を送る海神を忘れてはなるまい。三度くり返される「かつてのやうに」の合言葉は、大地と海洋といふ自然によって培はれ、築かれたアテーナイ、その市民の安眠と正夢にこそ、確たる再建の地盤を詩人はみようとする。かんらんの木と、草食む軍馬を指さす詩人は、神殿はなしでもよいとまで、つきつめて考へたかどうか。もし歴史の逆説、ときに皮肉をさへ言つてよければ、アテーナイの黄金時代は、焦土と化したふるさとに初めて開花したのであつた。それは決して火田民の自然経済ではないし、もちろん自然を忘れた思想や技術ではあり得ない。詩人は黄金時代の特徴と本質をどこにみてるだらうか。

8

「しかし母なる大地と海の神をたたへて、いま都市は花咲く、すばらしい造形、星辰のやうに、固く基を据ゑて、守護神の御わざ……」(V. 179—181)アテーナイの繁栄をうたふ第10段は、このやうに始まる。自然と神々と運命に、詩人はこれほどまでに忠実なのか、と改めておどろくが、守護神は「愛のかせ」を自らに課し、みづから建てた「偉大な形態のうちに」「つねに活動してとどまる」(V. 183後半: *der immer rege sich bleibend* 文法的に必ずしもすっきりせず)。ここにいふ「愛のかせ」は複数であるし、そもそも預言者ホセアのいふやうな「愛の絆」(旧約ホセア書11章)とは、言葉は似てゐても、視点がちがふであらうし、具体的にそれぞれの「偉大な形態」(これも複数)に神々が宿ることは、人が手で造つたものを拝む偶像崇拜の惧れを除けば、たとひ人が手を籍すにしても、ほんとうは神が自ら建てた「偉大な形態」に神が住まふのは当然だと言へることであらう。森の木材も、ペンテレ山の大理石も、噴泉も水盤も、みな輝かしい協力を惜しまず、人々の住居につゞいて、いくたの公共の施設ができ上

った。高くそびえる最高裁判所や体育館、そしてゼウスのためオリュムペイオン神殿が、アクロポリス（パルテノンその他）はアテーナーのため、「誇らかに悲しみの中よりそびえた」（V. 197）。そしてさいごに海の神のためにも、「汝のすばらしい丘」（アクロポリスを指す）は「なほ長くさかえた」と詩人は陳べてゐるが、アクロポリス北側のエレクトイオンにアテーナーと競ふポセイドンの絵が残されてゐるところ、両者の宥和をヘルダリーンは願つたとも解し得よう（Fr. バイスナー, Bd. 2, 2, S. 648）。たゞわれわれの詩においては、両者の比重はおのづと明かで、アテーナーはやはり都市アテーナイに密着せる母なる守護神であり、ポセイドンはもっとも古き神々の一人として、多島海全体の支配者であり、それ故また特にアテーナイの町を、その自由と文化を愛すると解される。海神の「愛子らが、喜びつどうて、なほしばしば（スュニオン）岬で御身に感謝をうたつた」（V. 199）とあるこの段の結びは、その意味においても微妙なところであるが、アテーナイの繁栄を神々の愛顧、ことにゼウス、その娘アテーナーとともに、海神ポセイドンの「愛のかせ」にもよるのだと考へる詩人の考へは明らかであらう。

もしもこのやうに考へてよければ、この三人の神々のうち、アテーナーが本来手工業や芸術の、そしてとりわけアテーナイの都市の、ほんとうの守護神として、少くともその市民に一ばん親しまれたし、ゼウスとポセイドンはその絶大な力を、自然界においてもつともよく現した。もちろん三者をむすぶ線として、自然と文化の背後からこれらに關する運命の力を、昔から誰も無視できなかつたし、『ヒュペーリオンの運命の歌』に象徴されるやうに、ヘルダリーンもまた運命にきはめて敏感であつたと言へよう。たしかに自然にふれて、内なる力が成長する詩人にとっては、自然は精神として働きかけるであらうが、文化的な生活についても、精神をよびさます自然の生命力と直接性だけで、自然の信仰だけで、よいものだらうか。シェリングやJ.-J. ルソーの自然傾斜を思ひ併せながらも、われわれはなほ何か足りない気がする。

9

アテーナイの黄金時代の文化と、なんらかの意味で之を将来するに與つて力あつた自然の、ことに地と海と天の絶大な力、この両者の深い、生き活きた關係に感動した詩人は、すでに200行に垂んとする詩行をもつて、しづかに生き活きと之を讃へてきたつもりである。之以上何をうたはうとするのであらうか。じつにヘルダリーンはさらに、これまでとほゞ同じ長さのヘクサメターをつらねて、死者を祀り、死者を歎き（V. 200—240）、もう一度自然の運命を訴へ、あげくの果てに、来るべき秋の祀りを望見する（V. 241—296）。われわれはこゝに、いはば運命の風景ないし風土をみるやうにおもふ。（vgl. R. Guardini）

またもや詩人は問ひかける言葉で始めるが、アテーナイの黄金時代といふ、過去の追憶から現実の現在にもどつた筈なのに、その問ひかける相手は、「幸運の子ら、敬虔な者らよ」と呼ばれる死者たちである。その点では、夢からさめて、たゞちに現実を歎きはじめる（L. Voigt およ

び M. Scherer, S. 101) とは受けとりにくい。「運命の日を忘れた」人々とは、アテーナイひいてはギリシャのために戦場で倒れた人たちを指すのであらうが、戦場にかぎらず、すべて祖国のために、いな社会と家庭と友垣のために、時ならず倒れた人々を指すのか、必しも定かではない。かれらは、「神々に似た姿」(V. 204), 「すばらしい名」(V. 216), 「神聖なる影たち」(V. 219) などと呼ばれてゐるが、抒情的自我の眼には決してみえず、それ故かれらの「魂が、たえず悲しみつつ、その影を求めて、わがもとに逃れ下る; といふ話を」詩人は聞いた(V. 203—207)。そして目にみえず、耳に聞え出した時点から、詩人はかれらに親称(複数)でよびかける。眼よりも耳を通して、たとへ稚拙でも誠実な「言葉」を通して、人の心の交わりが生れる。そして一たび親密な交流が生れると、詩人は真剣に死者たちとともに住まふことを憧れ求める。しかもそれがミューズの山パルナソスに、またミューズの泉カスターアに求められることも、この場合かなり特徴的であらう。「残るものを、詩人は作る」(„Anderken“最終行) と言って了へばそれまでだが、それだけでは済まない。何しろ詩人は大へんな意欲をもって、端的に、積極的な意志表示の言葉をもって、つまり ‚ich will‘ を4回もくり返し用ひて、パルナソスへゆきたい、水を灌いで供へ物したいと主張する(V. 210, 212, 216および219)。何のためかといへば、死者により近づくため(V. 208)であり、花かをる皿から苔の芽ぐむ墓へ水灌ぐため(V. 212f.)であり、「敬虔な歌をもって」死者たちを「宥めることを欲してゐる」(V. 219)。死者と生きることに、魂がすっかり慣れるまで(V. 220)とは、まことに真剣・誠実そのものといふ外ない。

いったいこの欲求ないし主張は、何なのであらうか? おそらくこゝに祖先崇拜の習俗や意識を比定してみても、始まらないだらうし、何やら抹香臭い隠遁を考へることも当らないであらう。たゞわれわれの詩において、春の海や黄金時代と全くそぐはぬものではないと考へることはできよう。アテーナイの春の祭りに、3日つゞくアンテステーリア(Anthesteria)といふ、ぶどう酒の神ディオニュソスにかかはる祝祭があり、その一日キウトロイ(Chytroi)は、厳粛な死者の祭、慰霊祭であるから。しかし詩にとって之は傍証にすぎないであらう。われわれはあくまで、この詩的自我の熱意と誠意のほどを、十二分に汲まねばならず、そのとき「より潔められた者」(V. 221)——と詩人自身がいふ——死せる人々にも、また生ける天上の力にも、いろいろ尋ねたいのだ(V. 221f.)。すると詩人はむしろ、死者たちの代弁者となり、神々に尋ねることにならう。ヘルダリーンはじつに巧みに転換点を用意したものである。

詩人自身が、胸中に迷ひを抱いてさ迷ったとき、神々は必しも応へてくれず、ドドナの森も、デルフィの神も、テーベの予言者(テイレシアス)も、十分な託宣(Orakel)を下さず、いまこれらの森と宮と町へ通ずる道は、わびしく荒れてゐる。しかしと詩人はつゞける、かなたに(„droben“)今なほ人々に語る光がある、と(V. 231)。そして雷神(ゼウス)と海神(ポセイドン)は、よろこんで敏感な人々、つまり敬虔な人の胸に休らふとし、さらに「ふるさとの山々に／エーテルが休らひ、しろしめし、臨在する」(V. 238)。詩人はやはり神々の現在を

信じて、死者たちの胸中を汲みながらも、父なる神の腕に抱かれて、一つの精神がみなに共通となると訴へてゐる(V. 240)。かうして死者の祀りと死者の訴へは、ミューズの山と泉を中心にして、さ迷ふ死者たちと休らふ神々たちのあいだで、まさに自然のなかにひびいて居り、詩人の宥和と執成が之を支へてゐるがごとくである。

ミューズの山や、託宣の森からもどって、現実の都会生活を始めると、どうであらうか？それは詩人にとって、夜の生活であり、地獄に居るやうだ、神々しいものがない現代は、とふたび歎声をあげる。かまびすしい仕事場で、野蛮人どもが荒々しく腕をふるって働いてゐるが、貧しい者の疲労のみ残るとして、極めて簡潔ながら詩人は、産業革命による「進歩」の社会を批判してゐることは明らかである。しかしながら、それにつゞく副文章の形でヘルダリーンは、現代の悪夢から目ざめて、かつてのギリシャのやうに、新しい時代に、われわれのより自由な額に、自然の霊が遠くから吹いてくるだらうと、歓声にも似た予言をのべるのであるが、現代への批判とともに、つよい希望をもって批判を弱めたのではなく、むしろ批判によって浄化され強化されたやうに、たえず生ける春(V. 255)をうたはずに居れない。もうこれ以上待てないとして、新しい祝祭の合唱を、青い山々と森のこだまに聞きとる(V. 257f.)。それどころか、自然の霊にみたされたやうに、詩人の想ひと言葉は、著しく高揚してゆく。「すべての生命は、神々しい意味にみたされた」(V. 267)。ここに自然を信ずる自然の子らにとって、自然が到るところで完成してゆくとみられ、さうなると「われわれの秋がきたら、今年の完成は近いのだ！」と、「アテーナイの喜び」や「スパルタの活動」を引合に出して、感歎しつゞける。ヘルダリーンは少し楽観的、或は空想的、或は軽卒にすぎるのではなからうか。しかしわれわれの心配をよそに、さいごの段に至ってもう一度、イオニアの春に立ちかへり、アテーナイの廢墟の緑に立ちもとほりつゞ、悲しみをかくして緑を養はんことをすゝめながら、マラトン(480 v. Chr.) からケロネーアス(338 v. Chr.) まで、倒れて山に眠る人々をおもって、あの悲しみと同時に希望をふくんだ『ヒュペーリオンの運命の歌』を、谷川が歌ひ下ることを求めてゐる(V. 282—287)。ここをよむと、詩人がいかに深く死者たちのことを感じかつ考へてゐたかが判るのであるが、もちろんヘルダリーンは、単純な運命論者などではない。また死そのものを讚美するやうなロマンティストでもない。ペリクレスの有名な演説のやうに、名誉のみが不滅で、勇敢にこそ最高の賞讃が与へらるべしとする考へとも、かなり違ふ。ふしぎにもまた死者たちは、いつまでも怨霊や復讐の女神たちに取りつかれてはゐないやうである。

どうやら詩人は秘訣を掴んだやうだ。もちろんたゞ何んでも水に流して済むといふ話ではない。死者たちの歎かふ歌を伴ひ山々を下る川は、変化しつゞ流れて(,ihr wandelnden Wasser'の,wandeln'には変化の意味もよみとれよう)、やがては海に入る。がしかしヘルダリーンは之をもって、たゞ単に瞑々のうちに合一するとは考へてゐない。多くの支流をあつめて、喜びの声をあげつゞ、待ち設ける生みの親へ流れこむ、といふゲーテの『マーホメットの歌』の大河のイメージとも違ふ。ヘルダリーンはすでに、カラウリアの白銀の溪流も、父なる神の大海原にお

ちてゆく (V. 17f.) ことを見届けてゐるが、すべての河川の流れこむ海、すべての河川の、いなすべての生物の生みの親ともいふべき海に向つては、必しも祭りの合唱が献げられなかった (V. 288f.)。しかし詩人は死者の歎きと運命の歌のすべてを知る海神の言葉こそ、しばしば自分の心にひびいてほしいと願はずに居れなくなった (V. 290)。そしてそれは精神が怖れなく活潑に活動するため、といふ積極的な姿勢を示してくる (V. 291f.)。決して盲、蛇におぢず式の荒々しい行動ではなく「神々の言葉、交替と成生を理解せんため」(V. 292f.) とある。いはば生々流転の変化を神的な言葉として受取らうとするのである。そしてはげしい時流が「あまりにも荒々しく」わが頭を捉へ、困窮と迷ひのうちに地上の生命がはげしく揺ぶられるならば、「大海の底で静けさを思ひ出したい」(V. 293—296) と結んでゐる。すると詩人のいふ変化は、たとひそれ自体は激しいものであつても、詩人の、したがつてわれわれの之に対する態度は、汐の音に耳を傾ける程の、ごくおとなしいものでよいのであらうか。たゞわれわれは、この「静けさ」(die Stille) の意味を、たとへば E. カッシーラーとともに、十分に深く汲みとる必要がある。われわれの詩でいへば、変化・変革を神の言葉として理解し、認識する精神の作業が先行せねばならぬといふことである。この予感と洞察をもってヘルダリーンは『多島海』をしめくくり、死者の祀りの風景をとち、たとひ現実の生活は「困窮と迷ひ」に押し流されたけれども、力のかぎり詩人の仕事をつゞけよう、くりひろげようと決意してゐるのだと思ふ。

参 照 文 献 (Text, Kommentar und Literatur)

- Friedrich Hölderlin. Grosse Stuttgarter Ausgabe : Band I, II Gedichte, Band III Hyperion, Band VI Briefe Stuttgart 1946ff.
- Das Meisterwerk Fr. Hölderlin, hrsg. von Ernst Müller, Stuttgart 1952
- Fr. Hölderlin, Gedichte, ausgewählt und erläutert von Ludwig Voit und Michel Scherer, München 1954
- Hölderlin. Werke und Briefe, hrsg. von Friedrich Beissner und Jochen Schmidt, Frankfurt am Main 1969
- Fr. Hölderlin, Sämtliche Gedichte, hrsg. und kommentiert von Detlev Lüders, Bad Homburg v.d.H. 1970
- Hölderlin. Eine Chronik in Text und Bild, von Adolf Beck und Paul Raabe, Frankfurt am Main 1970
- Hölderlin. Beiträge zu seinem Verständnis, hrsg. von Alfred Kellertat, Tübingen 1961, darin :
 Friedrich Gundolf, Hölderlins Archipelagus (1911)
 Ernst Cassirer, Hölderlin und der deutsche Idealismus (1917/20)
 Adolf Böckmann, Hölderlins Naturglaube (1944)
 Emil Staiger, Das dunkle Licht (1954) (*Staiger I*)
- Emil Staiger, Der Geist der Liebe und das Schicksal. Schelling, Hegel und Hölderlin, Frauenfeld und Leipzig 1935 (*Staiger II*)
- Romano Guardini, Form und Sinn der Landschaft in den Dichtungen Hölderlins, Tübingen 1946
- Jürg Peter Walser, Hölderlins Archipelagus, Zürich 1962